

◆2009年 2月

八木健選「七句」

1. **角材を板切れにして鮪買ふ** 前川敏夫  
板切れ・・・ならいいよ 鮪の薄造りでは情けない
2. **夜更かしの寝込みを襲う初メール** 種谷良二  
返信メールの逆襲ということもしばしば
3. **初夢の無念帯解くところまで** 可知豊親  
夢の中で帯を解くもどかしさ・・・ですね
4. **熱爛にして聞き役に回りけり** 飛田正勝  
サラリーマンの悲哀だね
5. **不条理の棒のつらぬく去年今年** 西をさむ  
なんでもいいから「ブレ」たりせずに貫きなさい 麻生さん
6. **ちんちんをねだり初湯の女の子** 佐藤古城  
かわいいね。いやらしさなんて皆無
7. **すごすごとバレンタインの日を帰る** 横山喜三郎  
恋に破れた猫みたいな若き日の喜三郎

---

今月の七選は 協会報で選んだ七選とは別の句を選びました。(八木 健)

---

青山桂一

初鏡虫と誤認すつけまつげ  
冬並木骸姿で整列す  
冬耕のできる田畑のまだありて

麻生やよひ

風邪もらふ予防接種の期限切れ  
雪だるま都会育ちの泥化粧

足立淑子

なるようになる初場所の視聴率  
春うらら本音は欲しい給付金  
体感で寒の戻りを識るキリン

有吉堅二

身を焦がす恋は御法度雪女  
流行り風邪大仏様の鼻の穴  
三つ指をついて雀の御慶かな

井口夏子

堂々とゆく素顔にマスクして  
無礼講といいながらゴマする新年会  
目力と鼻をきかして狩の夫

稲沢進一

息吸つてたちまち吐いてゴム風船  
梅の花みな美しく老いにけり

越前春生

寒中見舞お願ひごとの書いてあり  
三世代おもひおもひの福笑  
家中が他人行儀のお正月

笠 政人

煩惱の数には足りず除夜の鐘  
ご利益は靴の泥んこ初戎  
電線の押しくらふくら雀どち

加藤 賢

不器量のロボットもぬし猯枕  
セーターの少し派手かも犬の吠え  
音の出ぬ賽銭もあり初戎

草薙一朗

婚活のアラフォー族に淑気満つ  
「らくだ」から落語全集読初

有富洋二

鳥よりもさきに早梅見つけたり  
恋猫や思いのわりに傷深し  
月末が欠落したり二月尽

安藤淑子

残る年音たてて減るお正月  
迎へたくなき新年の又来たる  
嫁のおせちいはないけれど美味よ美味

井口寿々子

早蕨や牛舎の牛のモウと鳴く  
湯たんぼのエコと云はれて若返る  
寒満月来し方行く末お見通し

今城夏枝

お元日はや鳥来て糞をする  
新しき年はや五七五に追はれ  
トンネルを抜け新しき年になる

奥脇弘久

厄落し薬師・不動とかけ巡る  
煮凝のつるりと溶ける宴かな  
木瓜二輪慌てんぼうか魁か

可知豊親

初夢の無念帯解くところまで  
嫁が君無学の猫に喰はれけり  
寒紅に入れあげつひに山を売る

加藤澄子

夢に見し田舎の雪の初景色  
手と足を伸ばしきつたる初湯かな  
差し入れのお重のひとつお正月

倉方 稔

首斬つて尚もCM名の木枯る  
着脹れて職務質問数多受く  
その昔チンチン電車犬ふぐり

小杉 隆

鉛筆を耳に棟梁初仕事  
腰のばす先に富士あり大根引  
春宵や襟足すべる和剃刀

佐治洋一

腹の中黒くないよと鮫鯨は  
写真撮る「チーズ」に代わり  
「愛媛みかん」  
手品師に絡むロープや冬の雷

佐野ゆきこ

今時の犬はコタツでまるくなり  
鼻と鼻付けてあいさつ犬正月  
目が醒めた俳句作つて朝を待つ

清水呑舟

返盃に寒紅灰とにじみけり  
晩学の妻の背に置くちやんちやんこ  
手毬唄十までいくさ讃へけり

白井道義

日向ぼこしてだんだんと仏顔  
一月も半ばまだまだ無重力

杉村福郎

初詣電気ブランを聞こし召し  
ばついちが娘の分も破魔矢受く  
鮫鯨のごとく口開け見学す

高田敏男

覚えなき事も多くて去年今年  
お小遣ねだる子供や四方拝  
初夢や百花繚乱膝枕

高橋素子

ひと撞きが三百円の淑気かな  
摘んだことなし七種の名は知れど

桜井宇久夫

蕎麦の実を?む義歯くぐる爛の酒  
女正月廊下にナース大あくび  
春節やはめ外したる南京町

佐藤古城

買初めはすてきな奥さん付録つき  
ちんちんをねだり初湯の女の児  
わらんべに交じり舅も嫁つゝき

佐野萬里子

福引は等外ばかりミニティッシュ  
春隣野良猫軒を伝ひ来る  
弟との確執父の遺産から

首藤虎男

お年玉辞退する縁起受験生  
青田刈時代変りて消しかかる  
派遣切り刃もの使わず景気悪

壽命秀次

爆乳の巫女に並びて初みくじ  
年玉となり移り行く諭吉さま  
風邪に泣き七草粥の三日かな

鈴木和枝

地を這つてじつと絶えてる冬の草  
おでんの具冬を乗り切るためにある  
方言でほうれん草を育ててる

高橋真紀子

不況禍に為すすべなきや七福神  
赤チンを差す人日の深爪に  
賽銭を今年はずみ残り福

谷むつみ

沖合いの遥か彼方や宝船  
達磨市焼かれるダルマ僧呪む  
畦焼の煙のいつか横になり

田中章子

七福神舟におしあひへしあひし  
独楽まはしつひ手を出せりおじいさん  
なまはげの厨に入りてにぎり飯

飛田正勝

初夢やあの世この世の父とはは  
手締めされ漢はにかむ羽子板市  
熱爛にして聞き役に回りけり

長井知則

友の皺増えたと数え初笑い  
初恋と微笑む皺やクラス会  
軒下の母恋ふメダカや初氷

永島唯男

偏窟に磨きをかける寝正月  
なかなか尻尾を出さぬ嫁が君  
初夢や猿の丸焼き平らげて

根岸敏三

耐震にどこ吹く風や霜柱  
マスク顔手話擬きなり手の動き  
子供等は旧かな歌留多間違いと

彦阪義久

正月の豪華なるゴミ山ほどに  
初詣美人別嬪小町ほか  
噓とは脳のリセットボタンかな

日根野聖子

竹馬の暴れてうまく乗りこなせず  
あかぎれの傷の深々鏡餅  
滴りの形のままの氷柱かな

藤原セツ子

七種に一つ足りない粥なりき  
初日待つ心を波に洗はせつ  
黒豆の居場所はここよおせち重

種谷良二

夜更かしの寝込みを襲う初メール  
同じ顔化粧で作る成人式  
寒鴉暴く他人の私生活

戸谷笑子

アラフォーも通過点なり去年今年  
化粧する顔あればよし初鏡  
鉄砲も数撃ちや当たる初句会

中沢荘荷

春着の娘美女でなくてもよく似合ひ  
春着の娘うしろ姿をほめらるる  
異邦人雪の富士見てオオビューティ

西をさむ

不条理の棒のつらぬく去年今年  
初鶏の何時もとと同じ朝かな  
松過ぎて福沢・樋口・野口去る

原田 曄

セーターに移りたる吾が猫背かな  
をさな子の貌にすぎたるマスクかな  
耳貸せと猪鍋運ぶ素手を伸べ

久松久子

寒柝のセンサー灯に打損じ  
冬眠の獣に買った土地となり  
達筆な人のパソコン賀状かな

藤岡蒼樹

選別の賀状や十字輪ゴム止め  
玉霰海老一傘を回しけり  
清水の去年の一字は墨に吐く

藤森荘吉

東西が混ざり合つたる雑煮かな  
いいものを長く使つて長火鉢  
やむを得ずマイナス志向氷点下

堀川亮二

缶蹴つてカンコンカンと寒の径  
入りたればがんじがらめに炬燵かな  
インスタント料理尽くめの女正月

三塚美恵子

賽銭にもめるカップル厄参り  
亡失の紙飛行機や山眠る  
松過ぎの今だ止まらぬ喰いつぷり

虫倉蟬音

雪掘とあるは古文書雪を掃く  
底割れの株価よあがれ凧あがれ  
肩書に「高貴高麗者」寒見舞

百千草

恐いものなし着脹れの爺と婆  
母の背初湯の玉をころがしぬ  
膝の子の飽くなき腫数へ唄

山口えつこ

黒豆の皿を隠す子三十路かな  
呟きを聞くもよろしき福沸  
園児等の獅子舞発砲スチロール

山下正純

餅ヶ島雑魚天筏雑煮海  
年賀状家々秘物御開帳  
歌声の学舎に満つや春隣

山本けい子

これが最後と老翁の年賀状  
真つ新の肌着元旦の枕辺の  
乗り遅れ愛の火鉢を囲みゐる

横山喜三郎

省エネや猫熱源の春炬燵  
マネキンを脱がせて試着春スーツ  
すごすごとバレンタインの日を帰る

前川敏夫

声援に後へは引けず寒泳ぎ  
もと才女もと色男日向ぼこ  
角材を板切れにして鮪買ふ

三橋真砂子

春の土手隊長五歳ババ子分  
みかん剥く携帯持ためで盛上がり  
雪見風呂夫の合図のホーホケキヨ

村上美和

室咲や父の演歌を聴かされて  
煙突で呼吸してゐる眠る山  
生ゴミはまだですカァと寒鴉

山岡冬岳

ビリなれど卒業の子の胸を張り  
不可もまた勲章として卒業す  
旅に来て朝寝朝酒朝湯かな

山口 涛聲

雪しまく観光客の翼?ぎ  
雪像を見ぬまま帰宅雪ざんざ  
氷像を見ることやめてラーメン屋

山本あかね

天婦羅の海老も着膨れをりにけり  
観る人も見らるる鴨も雪を被て  
先生の前置き長き初講義

山本 賜

オムレツのカーブがきれい寒卵  
石路の花人目について人の恋  
冬の月サーカス小屋は多面体

吉田恵子

金髪にピアスを揺らし成人日  
お雑煮が出来たの声や寝床まで  
我が足と似たり大根洗いけり